

中世大友城下町（中世府内町）発掘調査事始め

大分市教育委員会駅周辺総合整備発掘調査班

一 はじめに

大分市は来るべき21世紀に向け大分駅周辺総合整備事業を推進しており、大分市教育委員会ではこれらに伴い一昨年从中世大友城下町（中世府内町）跡の発掘調査を実施している。

最盛期には九州六カ国の守護職を帯して、九州北半に勢を張り、その一方でキリスト教に傾倒しながら南蛮貿易を振興した大友氏。その拠点であった中世大友城下町（中世府内町）跡の本格的な発掘調査が始動したのである。本稿では調査内容の重要性に鑑み、ここに資料整理途上ではあるが、調査概要を速報的に報告する。

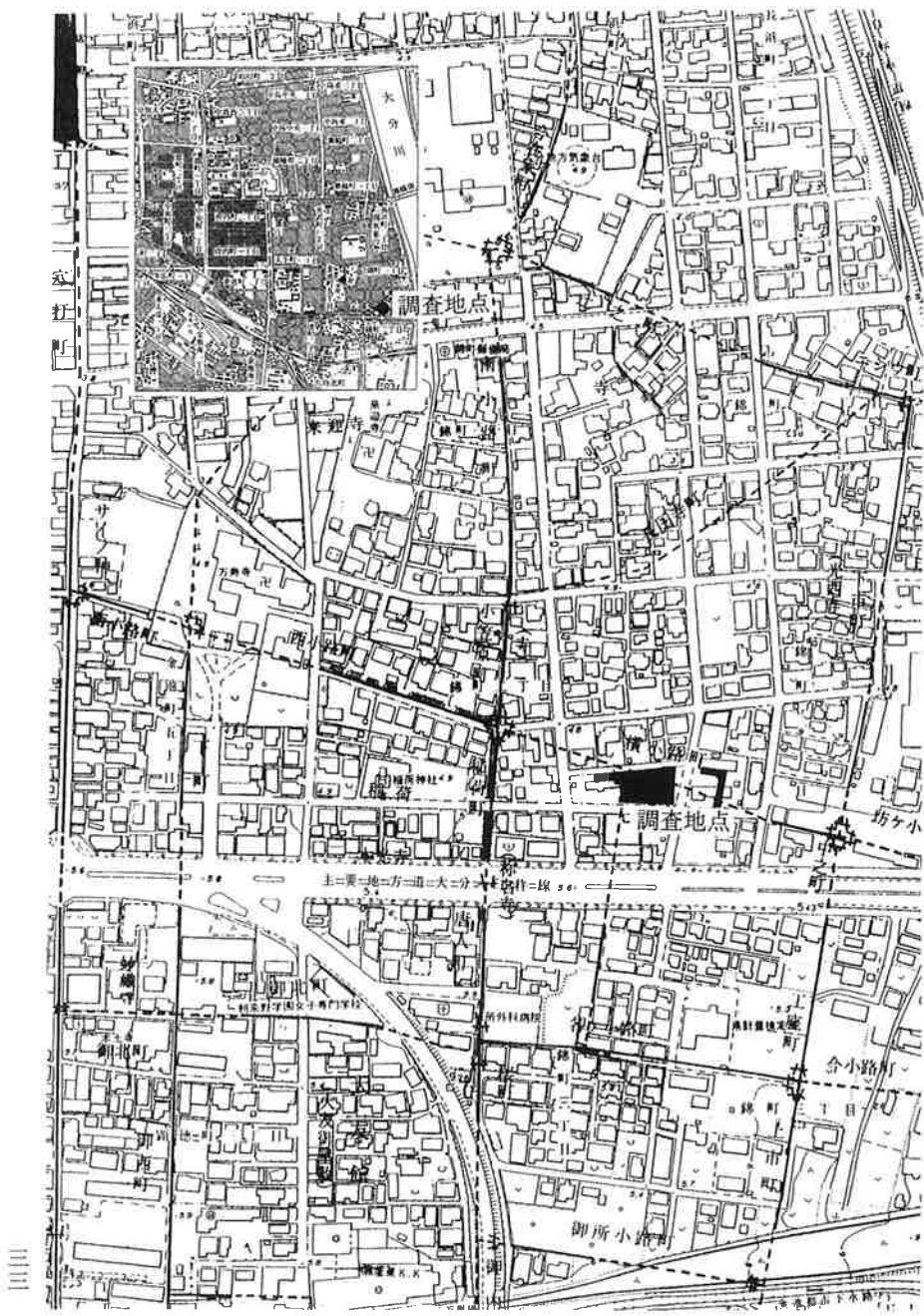
二 調査概要

今回調査を実施した第1～3次調査地点は大分市錦町二丁目にあたり、「戦国時代府内絵図」に基づいた復元想定図での「横小路町」に比定される地点に相当する。調査は以下の調査日程により実施した。

第1次調査 平成8年5月7日～平成9年4月2日

第2次調査 平成9年4月8日～同年7月31日

第3次調査 平成9年8月18日～同年12月5日



第1図 調査地点位置図(1/50000・1/5000) 『大分市史』中巻村図2を一部改変

第2次調査地点は第1次調査地点の北側隣接地にあたり、第3次調査地点は第1・2次調査地点の東側にあたる。総調査面積は980㎡である。

検出遺構には道路状遺構(SF001)、大甕埋設遺構(SX210)、溝状遺構(SD)、土坑(SX)、井戸跡(SE)などがある。

出土遺物については、板府系白磁皿、雷文帯青磁碗など14～15世紀に比定される遺物の出土も認められるが、主体は16世紀代の遺物によって占められる。土師器には底部糸切りのものと、いわゆる京都系土師器と呼ばれる非ロクロ成形による一群の2系統のものが認められる。出土量は圧倒的に後者が多い傾向にあり、これらには灯明皿使用の痕跡を残すもの他に、トリべに使用されたと推定される銅滓の付着したものも存在する。

以下に今回の調査で注目された遺構として道路状遺構(SF001)、大甕埋設遺構(SX210)の2遺構を取り上げ、遺構内容、出土遺物について略述する。

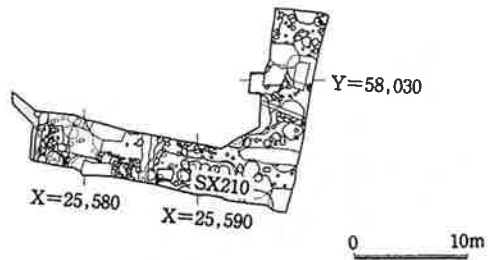
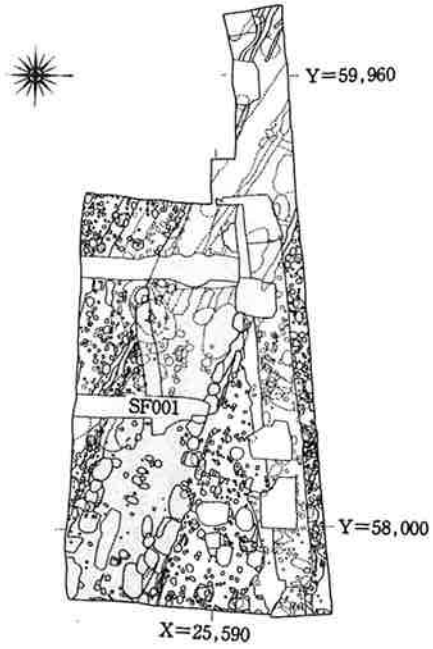
(1) 道路状遺構(SF001)

第1・2次調査区の中央および第3次調査区の南端で確認した。

第1・2次調査区の中央部分には遺構密度が疎となる帯状の空間を確認できる。この部分は検出面から約40～60cm程度掘りくぼめ、砂、粘土、小石等を版築状に突き固めた硬質土がみられる。現状で確認できる掘り込み地業と土層の分布範囲から、推定される路面幅は約10メートルを測る。南北両端には側溝と考えられる溝状遺構も確認されている。溝はほぼ同じ場所にも何度も掘削されている¹⁾。この道路状遺構は主軸N164-W方向に展開する。

(2) 大甕埋設遺構(SX210)

調査区西端部(第3次調査地点)において、南北に2列に並行して掘られた10基の円形・不正円形の土坑が検出され、このうち5基には備前焼大甕が埋設されていた。甕が出土しなかった土坑も、大甕が出土した土坑と形状や深さが極めて類似していることから、本来は2列10基の大甕が埋設されていたと考えられる。大甕は胴部下半以下が残存している状態であったが、甕



第2図 遺構配置図(S=1/600)

内部から出土した同一個体の口縁部形態から、いずれも間壁編年Ⅴ期²に比定されるものであると判断できる。

また、2列の大甕埋設土坑の間には大甕列と同一方向の柱穴列が認められ、大甕列と関連のある建物の存在が推定される。なお、この柱穴列の軸方向はN19°Eで道路状遺構(SX001)に対して直行せず、むしろ今回の調査地の東側に比定されている南北道路の方向と一致している点が注目される。

備前焼大甕の中からは多量の焼土及び炭化物とともに多数の貿易陶磁器及び国内産陶磁器が出土したが、甕が存在しなかった土坑の埋土や出土陶器も、大甕中のものと同様であった。出土した陶磁器については後述するが、これらの中には火を受けたものが多く認められ、さらに別々の土坑や大甕から出土した陶磁器に、互いに接合するものも多く認められる。以上の所見から、これらの陶磁器は、火災後に大甕中と甕抜き取り穴に一度に廃棄されたもの、すなわち火災処分により処分されたものと考えられる。

今回検出されたものと同様な大甕埋設遺構は、根来寺坊院跡・一乗谷朝倉氏遺跡・大坂城城下町跡など中世後期の遺跡で出土しており、「甕倉」とされているものである。この甕倉の機能



第3図 大甕埋設遺構(SX210)

に直接関わる大甕の用途については、藍染め、酒の醸造、油の貯蔵などが考えられてきたが、菅原正明氏は根来寺坊院跡出土大甕内面の黒色付着物の化学分析結果などから大甕の内容物は油であるとしている⁽³⁾。

今回出土したSX210も甕倉と考えられるが、その機能については甕の内容物の科学的分析結果を待つて判断することとした⁽⁴⁾。

出土陶磁器について

大甕埋設遺構(SX210)から出土した陶磁器のうち主体を占めるのは貿易陶磁器であり、その産地は中国、朝鮮をはじめ東南アジア各地にまで及ぶ。それらの概略については表1に示すが、染付の分類には漳州窯系の粗製品を除き、小野分類を用いている⁽⁵⁾。

出土した貿易陶磁器中、供膳形態では中国産の染付と朝鮮王朝産白磁が大半を占める。このような傾向は朝鮮貿易の拠点と位置付けられている福岡市博多遺跡群に類似しており、すでに同遺跡群において指摘されているように、「中世後半期を中心とした大内氏や大友氏によって展開された対李氏朝鮮貿易」が府内においても、進められていたことを示唆するものである⁽⁶⁾。

大型品については中国産陶器が主体を占め、一定量の東南アジア産陶磁器が含まれる。中国産陶器は、褐釉ならびに黒釉四耳壺、華南三彩壺などが確認されている。中でも、華南三彩壺の出土は全国的にも稀少であり、東京都汐留遺跡、大坂城城下町跡⁽⁷⁾、奈良県興福寺一乗院跡⁽⁸⁾での出土が報告されている。

染付碗にはC・E群と漳州窯系の粗製品がみられる。染付皿はE群が主体でF群がこれに次ぐ。漳州窯系のものは大皿のみである。青磁は白あるいは灰色に発色した産地不明の皿が多く、白磁は内底が露胎の粗製品が多く認められる。施釉陶器には華南産とされる褐釉、黒釉及び三彩陶器の壺がある。このほか注目されるものとして広東産の焼締陶器播鉢が出土している。

また、東南アジア各国の陶磁器については、タイ・ベトナム・ミャンマー産の陶器が出土している。タイ製の陶器はすべてノイ川窯産の焼締陶器四耳壺であり、東南アジア産の遺物としては出土量が最も多く、大坂・堺・博多・平戸などの国際港湾

表1 SX210出土貿易陶磁器の組成

産地	器種	分類	出土量	備考	
中国	青花碗	C	△		
		E	○		
			漳州窯系	○	
	皿	B 1	△		
		C	△		
			E	◎	
			F	◎	
			漳州窯系	△	大皿のみ
		壺		△	
		小 杯		△	
		その他		△	未分類
		色 絵 皿		△	
		青 磁 碗		△	
		瓶		△	
		皿		○	
		その他		△	
		白 磁 皿	C	△	
	D		△		
		内底露胎白磁皿C-2類	○		
	褐釉 四耳壺		△	大型品	
	三彩 壺		△	線刻、貼付の2種	
	蓋		△		
	焼締 擂鉢		△		
ベトナム	焼締 長胴瓶		△		
タイ	焼締 四耳壺		◎	ノイ川窯産(数タイプ有)	
ミャンマー	黒釉 三耳壺		△	1個体分	
朝鮮	白磁 皿		◎		
	雑釉 徳利形瓶		△		
日本	備前 大 甕	V期	◎		
		水屋甕	V期	○	
		四耳壺	V期	△	
		擂鉢	V期	◎	
		信楽 壺	VII期	△	
	鉢	VII期	△		

※出土遺物の量については、主観的・感覚的な相対量を示している。(△(少)→◎(多))



第4図 ミャンマー産三耳壺

都市を中心に出土事例が報告されている。中でも堺環濠都市遺跡のK1-203地点SK28に埋設された焼締陶器四耳壺からは火薬の原料となる硫黄が入ったままの状態で見出され、用途の一例を示唆する資料として高く評価されている⁽¹⁶⁾。

一方、ベトナム・ミャンマー産陶器については、前者が焼締陶器長胴瓶、後者は黒釉陶器三耳壺が各1個体確認されている。特にミャンマー産の黒釉陶器三耳壺については全国でも博多遺跡群に次ぐ2例目の発見であり、注目される⁽¹⁷⁾ところである。

これら東南アジア産の陶磁器は先述のとおり、すべて大型品であり、南蛮貿易に関連してもたらされた蓋然性は高い。

さらに、他の戦国大名同様、大友氏の火薬への執着は看過できず、この両者の関連性については今後検討すべき課題と言えよう⁽¹⁸⁾。

これらの貿易陶磁器の年代については東南アジア産陶器の存在を除けば、根来寺坊院跡(1585年焼亡)や大坂城における豊臣前期(一五八〇―一五九八年)⁽¹⁹⁾の出土遺物と類似しており、一五八〇年代以降、一六世紀後半から末に位置付けて大過ないと考えられる。

三 まとめ

今回の調査は中世大友城下町(中世府内町)跡の本格的な調査の嚆矢となるものである。調査面積の規模は、それほど大きな

ものではなかったが、道路状遺構の検出、大甕埋設遺構の確認、ならびに埋土内から出土した多彩な貿易陶磁器類の出土など数多くの貴重な成果をおさめることができた。

道路状遺構については、明治期字図と「戦国時代府内絵図」との比較検討、絵図に記載された寺社と現存する寺院との位置関係・距離等を考慮することで復元された「戦国時代の府内復元想定図」⁽¹⁴⁾の推定位置とはほぼ同一の地点において確認されている。これは復元想定の方当性を考古学的なデータから初めて傍証した事例として評価されよう。

第3次調査地点で確認された大甕埋設遺構は、埋甕内に多量の焼土を内包する点、二次被熱を受けた陶磁器類の存在などから、火災処理によって一括廃棄された可能性が示唆される。大友氏最末期にあって府内町の火災記録といえば天正一四年（一五八六）の島津軍の府内侵攻が想起される。甕からの出土遺物や備前大甕自身の年代はこの想定年代と大きな齟齬はなく、現状では廃棄の直接的な原因をこれに伴う火災処理に求めるとする蓋然性は極めて高いと考えられる。

さらに、埋甕遺構内から出土した陶磁器類は朝鮮、中国、東南アジアをはじめとする多彩なもので、当時の国際貿易都市である堺・博多に比肩しうる内容を有しているといっても過言ではない。これらの遺物は宣教師の報告に記録された府内の賑わいと大友氏の南蛮貿易の実態に肉迫する資料といえよう。

以上、中世大友城下町（中世府内町）跡の本格的な調査の口火を切ることとなった今回の調査は、当初の予想を上回る数多くの成果をもたらした。また、当時の遺構が現在の街並の地下に良好な状態で遺存していることが改めて確認され、今後の城下（府内）町跡の発掘調査に期待が寄せられるが、その一方で依然残された課題も多く、最後にこの点について触れ、まとめたい。

1 今後の中世大友城下町（中世府内町）跡の発掘調査を実施していくにあたっては、特に次の3点に留意する必要がある。

1 城下（府内）町の形成時期、およびその前段階の様相解明について。

2 天正一四年の島津軍豊後侵攻後の城下（府内）復興の考古学的な傍証資料の確認。

3 城下への家臣団集住、工人編成状況など具体的な「都市空間」構造の解明。

1については、今次の調査成果からのアプローチは極めて困難であると言わざるを得ない。

今回の調査において出土した遺物は中世末期のものがその大半を占めるが、古代～中世前半期の遺物も確認されている。

古代の遺物としては越州窯系青磁碗Ⅰ類や緑釉陶器、中世前半期では白磁碗Ⅳ類、同安窯系青磁碗ⅠーⅠーⅠb類、青白磁などが挙げられ、残念ながらこれらの遺物が帰属する遺構は調査段階では確認されていない。先述のとおり、今回の調査において出土している古代の陶磁器は、いわゆる官衙遺跡通有の遺物であり、当地の遺跡の様相を考察する上で貴重な発見と評価できよう。

天正一四年の島津軍の豊後侵攻後の状況については、大友氏の豊後支配が文禄二年（一五九三）の大友義統の除国を経て、竹中重利による府内城の完成・城下町の移転（一六〇五年）に至るまでの18年間に旧府内町がどの程度復興されたのかが問題となる。これまで部分的な復興の可能性については「天正一六年参宮帳」¹⁵の記述から指摘されてきた。考古学的にこれを傍証するための資料としては、胎土目段階の唐津焼（一五九〇～一六一〇年）の存在が現状では最も有力といえよう。しかし、今回の調査地点ではこの段階の唐津焼が確実に供伴する遺構は確認できていない。当該遺構の探索が今後の中世府内町跡の調査において重要な課題となろう。

3については、調査エリアごとの詳細な遺構データの修正が不可欠であり、調査事例の蓄積によって次第に明らかとされよう。今回の調査では鉾津やトリベに転用された京都系土師器の出土など、鍛冶工人の存在を示唆する遺物の出土が認められ、課題解明への一資料を提供した。

今後はこれらの課題究明にあたり、同遺跡の組織的かつ計画的な調査展開が要求され、豊後大分の一時代を築いた大友城下（府内）の全体像解明が期待される。

最後になりましたが、今回出土した陶磁器ならびに参考文献については以下の方々からご教示いただきました。御芳名を記して感謝申し上げます。

森村健一(堺市立埋蔵文化財センター)、鋤柄俊夫(大阪府文化財調査研究センター)、大庭康時・森本朝子(福岡市教育委員会)、宮田絵津子(山口県立萩美術館)、山本信夫(太宰府市教育委員会)、西田宏子(根津美術館)、吉岡康暢・小野正敏(国立歴史民俗博物館)、鈴木重治(同志社大学)、佐伯弘次(九州大学)(敬称略)

註

(1) このような掘込み地業を行う特徴的な道路構築は近世府内城下町遺跡第8次調査でも確認されている。元禄十一年(一六九八)に編集された『豊府聞書』にある中世府内から近世府内への移転に際して旧府内住民が近世府内町建設に主体的役割を果たしたとの記述から、近世府内町の道路が中世と同様の工事方法により施工された可能性がすでに指摘されている。

木村幾多郎「豊後府内の都市建設」『大分・大友土器研究』第21号 大分・大友土器研究会 一九九七年

(2) 間壁忠彦・間壁霞子「備前焼ノート」1-5(『倉敷考古館研究集報』1・2・5・18号) 一九六六-六八・八四年

(3) 菅原政明「甕倉出現の意義―中世経済の側面―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 一九九二年

(4) 小野正敏「15-16世紀の染付碗、皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.2) 一九八二年

(5) 小畑弘己「博多における16世紀から17世紀初めの陶磁器組成―博多第60次調査の成果から―」

『法哈噓』第2号 博多研究会 一九九三年

(6) 『汐留遺跡I』東京都埋蔵文化財センター 一九九七年

(7) 松本啓子「海を渡ってきた壺―いわゆるトラデイスカント壺―」『葦火』58号(財)大阪市文化財協会 一九九五年一〇月

(8) 註7に同じ。

(9) 田中克子「博多遺跡群出土の内底露胎の磁器の一群について」『博多研究会誌』第4号 一九九六年

(10) 森村健一「日本における遺跡出土のタイ陶磁器」『東洋陶磁第23・24号』 一九九五年

日本におけるタイ陶磁器の出土はタイからの硝石の輸入が背景にあると森村氏は指摘している。

(11) 『博多30』 福岡市教育委員会 一九九二年

(12) 松田毅一監訳『16・17世紀イエズス会日本報告集 第Ⅲ期 第3巻』一五六五年—一五七〇年 一九九八 同朋社

「横岳家文書」『佐賀縣資料集成 古文書編 第6巻』一九六二年 佐賀県立図書館 などがあげられる。

(13) 鈴木秀典「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」『関西近世考古学研究』Ⅰ 一九九一年

(14) 『大分市史(中巻)』付図 一九八七年 大分市

(15) 渡辺澄夫『豊後国荘園公領史料集成5(上)』 別府大学史料叢書 一九八九年

本稿は、杉崎重臣、高島豊を中心に坪根伸也、河野史郎、塩地潤一で協議を行い、成稿したものである。